B組2枚目

3年生が宝塚市に取材し、記事を書きました

宝塚市の全面的な取材協力と、一部写真提供も受けました。
記事・レイアウトは産経新聞社の協力を得て作成しました。

雲雀新聞

令和5年(2023)
3|23[木]

雲雀丘学園中学校
〒665－0805
兵庫県宝塚市雲雀丘4－2－1
TEL：072－759－1300
FAX：072－755－4610

日本の長寿 秘訣は学校給食

安心安全、苦手克服へ工夫満載

宝塚市は、学校給食についてどんな取り組みをしているのか。私たちは、宝塚市立中央公民館で栄養教諭、学校給食調理員、学校給食課のみなさんを取材した。給食を提供する上で大切にしていることは、という質問には、「安心、安全、安定的に子どもたちへ給食を届けること」と答えてくれた。

（青山華、石田彩乃、海老原奨、木村遥花、田中万琳、冨田真央、村松沙恵、森明理）

学校給食課と、各学校にいる栄養教諭、調理員のみなさんが連携して給食を提供しているが、一般の人にも給食のことを知ってもらおうと、食育劇も行っている。学校給食課の職員は、甲子園大の管理栄養士専攻のみなさんに向けて、食育実践実習の講義も行っており、将来の管理栄養士育成にも貢献している。

より多くの人々に、給食への関心を持ってもらうために、学校給食課はSNSも積極的に活用している。独自の取り組みとして、動画配信サイトで食育に関する動画を紹介したり、全国初の試みとして、宝塚市の給食のレシピをクックパッドで公開したりしている。

食材は基本的に市内の業者から仕入れており、その際に条件となるのは、安全を最優先に、おいしさや旬、伝統を考慮している。そのため国産、無添加のものを使用し、地産地消の観点から、4月と8月を除いて、市内で農業が盛んな北部の西谷地区の食材を使うこともあるという。

各学校の栄養教諭のみなさんは、常に生徒のことを第一に考えているそうで、そのため、苦手な人が多い食材は、何度も出し続けて、慣れてもらうようにする一方、調味料など食材の組み合わせを変えて「克服」できるように工夫をしている、と教えてくれた。また卵やタコ、エビなどのアレルギーがある子どもには、除去食を提供している。

しかしどんなに努力しても、給食の食べ残しが出てしまう。一人あたり、一日およそ20グラムほどとなり、児童約600人の学校を例にたとえると、10～20人分の給食が残ってしまう計算になるという。

給食は、集団で食べることの楽しさを実感できる。やがて大人になると子どもの頃に食べた給食は、思い出に残るだけでなく、「良い栄養バランス」「良い食生活」が自然と身につくため、日本人が長生きする秘訣にもつながっている。

子どものころに当たり前のように食べていた学校給食の裏で、給食に携わるさまざまな方が努力し、協力し合っていることが分かってよかった。

当たり前の生活できる街へ
「障碍（がい）」に込めた願い

市障碍福祉課

宝塚市が「手話言語条例」を紹介するためつくったパンフレットから

障碍（がい）がある人も、当たり前に生活できるようサポートしている宝塚市障碍福祉課の田中雅之課長と、手話通訳士の笹倉博己さん、田中埋子さんが、宝塚市政を取材して新聞づくりに取り組んでいる雲雀丘学園中3年生の取材に応じ、「相手を思いやることが大切」と話してくれた。

宝塚市障碍福祉課の職員は、障碍のある人や周囲の人から意見を聞き、活用して街づくりを進めていく。簡単そうにみえて、大変な仕事。

今回の取材では、障碍福祉課が果たす大切な役割と「秘訣」を探った。

同課が、「障碍」という字を使うのには意味がある。それはなぜか。「障害」という言葉では、「害」の文字が「害する」とか「わざわい」という意味を持つとして、宝塚市は使用を控えてきた。その後「碍」を使うようになった。この字を使うにあたって「みんなで社会的障壁を取り除きたい」との目標が込められている。

宝塚市の人たちとって、障碍福祉課は大切な存在だ。リアルタイムに依頼してもらえるよう、メールでの依頼も受け付けている。中には「耳が聞こえない人と、お話ししたい」という、聞こえる人からの依頼もあるという。

新型コロナウイルスは、「障碍のある人に大きな影響を与えている。マスクを着用しながら生活しているため、口の形が見えず、音が聞こえなかった場合、意思疎通がうまくできないことがあるという。

ところが、そこで、手話通訳をする際、口元が見えるマスクをつけて行おうとしたところ、今度は医療現場で、感染防止の観点から断られたという。

取材して、相手を思いやる力が大切だと考えた。障碍のある人がどんな風に生きているのか、どういう立場にいるのか、を考えなければならない。

（瀬戸菜月、永松みなみ、西口河泉）

電子版で全国の最新紙面を読む
地域版から地理学ぶ

地域で起こった出来事を、生活に密着した形で掲載している新聞の地域面。兵庫県宝塚市の雲雀丘学園中では、産経新聞の地域面を「最新の教材」として使う地理の授業が行われている。「最新の話題を知り、日本のことを学ぶ。産経新聞の電子版の紙面を同学年で定期購読し、西山教諭は先に地域版で関心のある記事を探したシートを作成させてから、改めてその地域のことを学んでいる。これまで生徒は、九州地方と中四国地方の記事から、関心のあるものを選んでいた。

紙の新聞の購読と異なり、産経新聞の電子版のメリットは、掲載されているすべての地域面を読むことができる点。新型コロナウイルスで普及が進んだタブレット端末で紙面を見ることができ、生徒は熱心にページを“めくって”記事を読んでいく。

「学校の教材では、どうしても最新の出来事をカバーすることができない。地域面の記事を生徒たちが自分で読み、関心のあるものを探すことによって、最新の話題が、ダイレクトに伝わっていると感じます」（西山教諭）

一つの例として西山教諭があげたのが、茶の生産額で、令和元年に鹿児島県が静岡県を抜いてトップにたったことを分析した九州山口版の記事（5月28日付）。高級志向の強い静岡に比べ、ペットボトル向け事は、多くの生徒が選んだものの一つだ。高松市のベンチャー企業が、瀬戸内海の離島を結んで物資を運航したというニュースで、運航開始を喜ぶ高齢者のコメントも掲載されている。

「生徒は、関心をもって記事を読み込んでくれています」―。授業を担当する西山新世教諭は話す。

同校では、中2の地理で日本のことを学ぶ。産経新聞の電子版を同学年で定期購読し、西山教諭は先に地域版で関心のある記事を探したシートを作成させてから、改めてその地域のことを学んでいる。これまで生徒は、九州地方と中四国地方の記事から、関心のあるものを選んでいた。

紙の新聞の購読と異なり、産経新聞の電子版のメリットは、掲載されているすべての地域面を読むことができる点。新型コロナウイルスで普及が進んだタブレット端末で紙面を見ることができ、生徒は熱心にページを“めくって”記事を読んでいく。

「学校の教材では、どうしても最新の出来事をカバーすることができない。地域面の記事を生徒たちが自分で読み、関心のあるものを探すことによって、最新の話題が、ダイレクトに伝わっていると感じます」（西山教諭）

一つの例として西山教諭があげたのが、茶の生産額で、令和元年に鹿児島県が静岡県を抜いてトップにたったことを分析した九州山口版の記事（5月28日付）。高級志向の強い静岡に比べ、ペットボトル向けの茶葉を大規模栽培で生産したことなどを読み取れる。

西山教諭は「『お茶』といえば、みんな静岡が一番だと考える。しかし鹿児島県がトップだという情報に、生徒も驚きを持って記事を読むことで地域への関心が高まる。新聞を使っていなければ得られない情報だと思います」と話す。

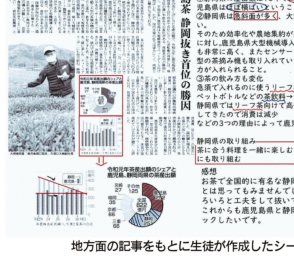
■　■

中四国の記事について発表しあった9月末の授業では、香川のドローンの話題を取り上げた生徒から「佐賀県でも、ドローンを荷物の配送に使おうとしているという記事があった」との発言があった。5月20日付で九州山口版に掲載された記事だ。

過疎高齢化は、今やどの地域でも喫緊の課題であり、ドローンは問題解決の手法として広く注目を集めている。最新の話題に関心を持ち、生徒が一つ一つの出来事を単発で考えるのではなく、関連づけて考えることができているところが、新聞の地域面を使って地理を学ぶことの良さを“証明”している。

■　■

令和3年10月14日夕刊掲載の記事。当時2年生として授業を受けていた生徒が今回宝塚市を取材し、原稿を書きました。


九州地方　5月28日　2学年A組 37番

大規模栽培、ボトル向け拡大

鹿児島茶 静岡抜き首位の勝因

鹿児島県の生産額は10年で約倍以上増えたが、鹿児島県は[illegible]ということ。
②静岡県は[illegible]大型機械の導入が難しい。
そのため効率化や地集約が思うように進まないのに対し、鹿児島県大型機械導入率は97%超で全国的にも非常に高く、またセンサーを使った無人で動く大型の茶摘み機も取り入れているので、他の作業にもが入れられること。
③茶の飲み方も変化
急須で入れるのに使うリーフ茶→10年で16%減少
ペットボトルなどの茶飲料→10年で34%増加
静岡県ではリーフ茶向けて高価格帯の1番茶を重視してきたので消費は減少
などの3つの理由によって鹿児島県に抜かれた!!!

静岡県の取り組み
茶に合う料理を一緒に楽しむ「ティーペアリング」に取り組む

感想
お茶で全国的に有名な静岡県がまさか抜かれるとは思ってもみませんでした。けれど、まだいろいろとスキを見て頑張ってくると思います。これからも鹿児島県と静岡県とのバトルをチェックしたいです。

地方面の記事をもとに生徒が作成したシート

市民23万人の助けに

山﨑市長 なぜ弁護士から転身？

生徒の取材に応じる山﨑晴恵・宝塚市長（右奥）

宝塚市のトップに立つ山﨑晴恵市長に昨年12月、宝塚市役所特別会議室でインタビューした。弁護士として活動してきた山﨑市長は「弁護士のときは、一人の依頼人に対して全力を尽くしていたが、今は市民23万人の助けになれるということが、一番素敵だ」などと熱く語った。

山﨑市長は、宝塚のまちで子育てをしてもらいたい、という願いから「きらきら子育てLINE」の配信を導入した。

「きらきら子育てLINE」は、妊娠から生後100日まで、毎日、タイムリーな情報を発信し続ける。その後も3歳の誕生日まで、成長過程に応じた情報を発信し、子育て中の家庭をフォローする。ほかにも、宝塚市の取り組みを動画投稿サイト「ユーチューブ」で配信するなど広報活動にも力を入れている。

山﨑市長は、当選するまでは、弁護士として、主に女性と子どもの人権を守ることを担当していた。その力を市長になってからも発揮し、子どもをめぐるさまざまな課題に対応するため、「スクールロイヤー」制度を設置した。

スクールロイヤーには、男性の弁護士2人と、女性弁護士1人が任命された。スクールロイヤーと連携しつつ、生徒たちのSOSを把握し、解決できるよう取り組んでいる。

山﨑市長は、中川智子・前市長から『スカウト』される形で市長選に立候補した。無所属で知名度も高くなかったが、元県会議員の候補も、山﨑市長を含む4人が立候補する、厳しい戦いを勝ち抜いて当選した。

（黒岡千結子、角田幸謙）

LINE活用 子育てのまち、たからづか

山﨑市長は、当選するまでは、弁護士として、主に女性と子どもの人権を守ることを担当していた。その力を市長になってからも発揮し、子どもをめぐるさまざまな課題に対応するため、「スクールロイヤー」制度を設置した。

スクールロイヤーには、男性の弁護士2人と、女性弁護士1人が任命された。スクールロイヤーと連携しつつ、生徒たちのSOSを把握し、解決できるよう取り組んでいる。

山﨑市長は、中川智子・前市長から『スカウト』される形で市長選に立候補した。無所属で知名度も高くなかったが、元県会議員の候補も、山﨑市長を含む4人が立候補する、厳しい戦いを勝ち抜いて当選した。

（黒岡千結子、角田幸謙）

清潔な生活守る「きずな収集」

職員が玄関先へ 安否確認も

宝塚市のパッカー車

ごみを収集し、私たちの清潔な生活を守ってくれている宝塚市クリーンセンター（宝塚市小浜）で、私たち雲雀丘学園中3年の取材班が昨年12月、クリーンセンター施設建設課の前畑和彦さん、管理課の木村安紀子さん、業務課の杉村佳昭さんを取材した。

クリーンセンターの取り組みで、紹介したいのが「きずな収集」だ。高齢者や障碍のある方は、ごみステーションやゴミ箱まで自分で捨てにいけなかったり、家族や近所の人の協力を得られなかったりする場合がある。そこで、収集する側が、玄関先まで出向いてごみを収集する。

安否確認にもつながるし、中には寂しさをまぎらわそうとして、職員と話し込む人もいるという。

「きずな収集」については、現在市内で800世帯ものたちが利用している。これまで2400件を超える申し込みがきている。

このほか外国から来た人のために、他国語のごみ分別のパンフレットを作成したり、小学校の社会見学なども行ったりしている。今回話を聞いた前畑さんは「市民の役に立ちたいと思いました。それが、この仕事についたきっかけです」と答えてくれた。

収集した家の人々からは、「ありがとう」とお礼の言葉をかけられることもあるという。そのおれが、仕事のやりがいになるのではないかと思った。

宝塚市は、家庭から出る「燃やすごみ」について、平成27（2015）年度から、令和9（2027）年度までに5%削減する目標をたてている。これは市民一人あたりにすると、1日20グラムのごみを減らすことで、達成される量だという。

（稲葉光希、金田昊、國頭英鞠、高田亮敬、本岡直樹）